

貧困の豊かさ

ルカによる福音書 21 : 1 - 4

21:01 イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。 21:02 そして、ある貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て、 21:03 言われた。「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。 21:04 あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」



貧しいやもめが献げたレプトン銅貨2枚の方が、金持ちが寄付した多額のお金よりも価値がある。このイエス様の言葉、「額ではない。気持ちだ。」ということでしょうか。日本人のいわば社交辞令として、「心ばかりのものですが」とか「つまらないものですが」と謙遜の言葉を言いながら、お土産を、それも場合によっては結構値の張るものを、差し上げるという習慣があります。気持ちや誠意を大切にす文化だということでしょうか。そういう日本的な心情として、このやもめが貧しいながらも精いっぱいのもを差し出したということイエス様が評価なさったのだと考えれば、日本人として分からなくもありません。

けれども過酷な自然の脅威にさらされていた砂漠の遊牧民の価値観からすると微妙にニュアンスが違ってくるようです。ここでやもめが持っていたお金が、レプトン2枚というところがミソです。レプトンというお金の単位は、デナリオン1の128分の1だそうです。そして1デナリオンは、1日分の労賃に相当すると言われています。今日の時給を800円とすれば、8時間労働で、6400円になります。その128分の1は、ちょうど50円。2枚ですから、彼女が持っていたのは100円。ほんのわずかのお金で、それが全財産でした。時代状況が違いますから一概に比較はできないのですが、仮に皆さんが100円2枚持っていたとして、それが今晚の食事代だとしたら、どうしますか。献金しますか。先日、コンビニで200円のカロリーメイトを買おうとしたら、半分サイズで100円というのがあり、「こっちでいいや」と安い方を買いました。わたしがやもめだったら、2枚あるのですから、1枚はのこしておいて半分サイズのカロリーメイトを買うかもしれないと思います。けれどもこのやもめは、全額献金してしまいます。これが自然の恵みを利用して生きてきた農耕民と、自然の脅威と背中合わせで、生きるか死ぬかを選んできた遊牧民の違いなのでしょう。ここには、どのような思いがあるのでしょうか。

イスラエルの献げ物は、羊や農作物でした。しかもその中でも、最初に生まれた羊であったり、農作物なら初物を献げ、さらにはそれらを焼き尽くしたのです。決して祭司の生活や神殿の運営のために使われるものではありません。わたしも牧師になるために学んだ農村伝道神学校で農作業をやりましたが、最初の収穫は、それはもう嬉しいものでした。しかし、イスラエルはそれを神に献げたのです。どんなに残念な思いがしたことでしょう。もったいないと思ったことでしょう。それでも献げたのは、「自分たちの命を支えているものは、家畜や穀物ではない。神だ。」という信仰があったからなのです。イスラエルの宗教は自然信仰ではなく、生ける神との人格的な交わりでした。その信仰が、常に維持されたわけではなかったでしょうが、少なくともこのやもめは、その信仰を表わしたと考えることができます。「レプトンが私の命を支えているのではありません。神が支えてくださるのです。」彼女は、その信仰に生きる決心をして、2枚献げたのです。

けれども、この砂漠の民の捨て身の信仰は、ちょっとアブナイ気がするのですが、みなさんはいかがですか。アラーのためには自爆テロも辞さないという過激な信仰に通じていけないでしょうか。

このやもめの行為が原理原則になればそういう危険があります。ルカがこの福音書のほかにもう一つ手がけた文書に使徒言行録がありますが、そこに財産を教会に寄付した人々の様子が記されています。使徒言行録4章の32節以下です。「信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。」けれどもこれは決して信仰の原理原則になったわけではありませんでした。その証拠に、すぐ後の5章では、アナニアとサフィラという夫妻を非難したペトロの言葉が次のように記されています。「売らないでおけば、あなたのものであったし、また、売っても、その代金は自分の思いどおりになったのではないか。」つまり、これは、あくまで自由意志だということです。原理でもなければ原則でもありません。もし教会が、多額の献金を信者から集めることをして、それが信仰の証だと言うようになったとすれば、それこそカルト宗教です。

そうなれば、神にすべてをゆだねるというやもめの信仰の真の意味も、消し飛んでしまうでしょう。聞こえよがしに献金の額を告げるのが当時の慣わしでしたが、このやもめはレプトン2つで見栄を張ることなど考えなかったでしょう。信仰とはその行為によって何かの報酬を受け取ろうとするようなものではないのです。たとえば、その人の信仰深さを証明するとか、或いはそれによって義とされ、神に受け入れてもらえるとか、さらにはそれによって天国に行けるとか…。原理主義者は正しさという見返りを期待します。しかしそれは神との取引、神を買収する行為に他なりません。見返りを期待しない。強いて言えば、ゆだねる行為そのものが報酬です。「神様、あなたにゆだねます。」で終わりです、それで満足です。「だから救ってください。」とは言わないのです。救うも救わないも神の意志。でも、私は神を信じてゆだねます。これが献げものを焼却するイスラエルの伝統です。

イエスの時代よりもはるか昔、バビロン王によって捕虜にされた3人の若者が、信仰を変えなかったために、燃える炉に投げ込まれることになりました。その時3人はこう言いました。「わたしたちのお仕えする神は、その燃え盛る炉や王様の手からわたしたちを救うことができますし、必ず救ってくださいます。そうでなくとも、御承知ください。わたしたちは王様の神々に仕えることも、お建てになった金の像を拝むことも、決していたしません」(ダニエル3:18)。彼らは、「そうでなくても」と言います。たとえ期待通りの見返りや結果にならなくても、それは問題ではない。信じると決心して、そのように振舞うこと、そのことがすでに彼らにとって報酬であり、活力の源だったのです。

このやもめは、自分の手の中にある二粒の銅貨を、しばらく見つめていたかもしれません。どうしよう。一つ入れて、一つ取っておくことだってできたのです。誰にとがめだてされることもありません。それでも彼女は、「うん」と頷いて、2つ入れました。その時彼女の気持ちは晴れがましかったのではないのでしょうか。「今日は断食だ！」と晴れやかに心に呟いていたかもしれない。その様子をイエス様は見ておられました。誰に誉められるでもない、ただ自分の中での納得の行為に、イエス様は信仰を見られたのです。

信仰とは、悲しみが無くならなくても快活に振舞うことを選ぶことであり、不安がなくなっても落ち着いていることを選ぶことであり、貧乏から抜け出せなくても、見返りがなくても、差し出す生き方を選ぶことです。信仰とは、救われるための手段ではなく、それ自体が救いであり、成就であり、報酬であり、喜びであり、誇りであり、活力の源なのです。